



■ CO-DIALOGUE

岡部 太郎

(一般財団法人たんぽぽの家 常務理事)

x

東岳志

(山本書店主 / サウンドエンジニア)

Review by Spectator

野口基海 (美術批評家 / 詩人)

■ オープン北加賀屋

- みんなのうえんラボ
金田基孝 (NPO法人ヨトハナ)
- 旧千鳥文化住宅再生日誌
家成俊勝 (dot architects)
- 街と路上の風景図鑑
MASAGON (アーティスト)

■ TOPICS from CFCC

■ RELAY COLUMN

西山広基 (NO ARCHITECTS 代表 / 建築家)
みずのてつお (京都市造形芸術大学
名誉教授 / NPO法人造形デザイン
スクール 理事長)

no. 016

Mar. 7, 2018

paper

<http://www.chishimatochi.info/found/>

paper

“paper C” by Chishima Foundation for Creative Osaka



おおさか創造千島財団



CO-DIALOGUE

岡部 太郎

(一般財団法人たんぼの家 常務理事)

1979年、群馬県生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。高校時代から地元の前橋市にてコミュニティアート活動に参加。1999年に前橋市役所で開催された「Group文字屋」展をきっかけにたんぼの家と出会い、2003年から現職。国内外で障害とアートに関するプロジェクトを展開。



東岳 志

(山食音 店主/サウンドエンジニア)

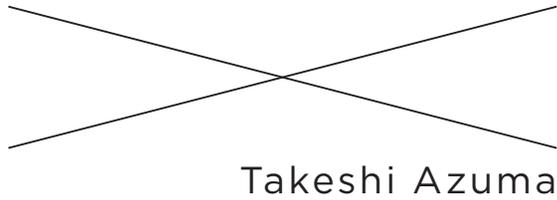
1980年、奈良県生まれ。音楽や映画の音響を担当。日常の音楽や風景の感動はどこから来るのか多角的に検証をしていくなか、食べることや身体を使うことが非常に重要であると考え、2016年にヴィーガン料理と山の道具を扱う「山食音」を、「山と道」と共同で京都・出町柳にオープン。

収録日: 2018年1月26日(金)

場所: たんぼの家 アートセンター HANA [奈良県奈良市]

photo: Mai Narita

Taro Okabe



Takeshi Azuma

その人の日常と向き合い、 経験をとらえ直す

東: 僕は、京都でサウンドエンジニアの仕事をしつつ、出町柳にある「山食音」という、山道具の販売と南インド料理を提供するお店を運営しています。さきほどたんぼの家の見学しましたが、障害のある人の自発的な活動をサポートする環境が整っていて驚きました。

山食音(やましょくおん)
南インド料理を提供するヴィーガン食堂と、ハイカーのための山道具メーカー「山と道」が共同運営するスペース。2016年オープン。山道具の販売および展示、山でのフィールドワークなど企画する山部門、京都の野菜を使った定食やスイーツ、野菜販売等の食部門、カセットテープレール「kolo」の拠点、ベアマイク録音の受付窓口などの音部門、各分野が交わる場所を目指している。

岡部: たんぼの家は、1973年に市民活動としてはじまりました。今では、ここ「たんぼの家アートセンターHANA」で障害のある人の表現活動の支援をしながら、一方で従来の福祉の枠にとわかれずに国や企業、教育機関などと連携して、「障害とアート」に関する活動を広く伝える取り組みも行っています。近年の大きな動きは、福祉と仕事の新しい関係づくりを考え、障害のある人の働き方を広げていく「Good Job! Project」、その拠点となる「Good Job! センター香芝」の設立ですね。さまざまな分野の研究者やつくり手を巻き込みながら、協働による仕事づくりを模索しています。

たんぼの家
「アート」と「ケア」の視点から、アートの社会的意義や市民文化について開きかけるさまざまな事業を実施する「一般財団法人たんぼの家」。障害のある人の「アート・ケア・ライブ」を柱に、日中活動・就労支援、相談支援・生活支援、福祉ホーム、地域の配食サービスなどを行う「社会福祉法人わたぼうしの会」。そして、たんぼの家の活動を支える市民活動団体「奈良たんぼの会」の3つの組織で構成。

東: 岡部さんは、どんなきっかけで働くことになったんですか？
岡部: 今から18年前、多摩美術大学でデザインを学ぶ学生で、地元・前橋で展覧会などのボランティアをしていました。2年生のときに手伝った展覧会で、たんぼの家メンバーの伊藤樹里さんの書の作品と出会い、衝撃を受けたことがはじまりです。

たんぼの家アートセンター-HANA
2004年にオープンした、たんぼの家のコミュニティ・アートセンター。すべての人がアートを通じて自由に自分を表現し、互いの感性を交感することができる場として機能。障害のある人たちが個性を生かしながらビジュアルアーツやパフォーマンスアーツに取り組むスタジオ。今を生きる人たちの表現を紹介するギャラリーなどを擁する。障害のある人の表現を、社会を豊かものにすることを目指す「エイブル・アート・ムーブメント」の活動拠点。

東: 運命的な出会いですね。
岡部: そうなんです。また同行していたたんぼの家のスタッフと話す、アートに対する造詣の深さはもちろん、「障害のある人」ではなく、「ひとりの作家、人間」として作家と向き合う姿勢に強く感銘を受けました。それまで想像していた「福祉」とはまったく異なる活動に驚き、大学を1年間休学してたんぼの家でインターンシップすることに。急な決断で、周囲から

アイデンティティの自由を尊重してゆく社会的な風潮も育まれてつつある一方、差別や想像力の欠如に、目を見張る場面もないまぜになっている現在。「障害」という言葉の持つ意味も、受け取る側の想像力と経験知に左右されています。いま私たちには、自分のなかにある先入観や偏見を検証し、想像の届く範囲と距離を時代や環境の変化によらずともアップデートしていく本質的な姿勢が問われているのではないのでしょうか？ 今回のCO-DIALOGUEでは、「ただその場にいることの力」をテーマに、一般財団法人たんぼの家の岡部太郎氏、サウンドエンジニア・東岳志氏にお話をいただきました。

は驚かれましたが、こんな僕でも受け入れてくれる懐の深さがたんぼの家の魅力だなと改めて思います(笑)。

東: 見学しながら、メンバーに寄り添い、施設でできることを模索するケアの現場で働くスタッフの様子が伝わりました。

Good Job! Project
障害のある人とともに、アートやビジネスなど福祉の領域を超えて、新たな仕事や仕組みづくりを目指すプロジェクト。2012年、大阪で初の展覧会「Good Job!」を開催し、障害のある人の表現を活用した魅力的なプロダクトを紹介。2013年からは「Good Job! 展」と題し、プロダクトに限らず、今までの労働観では考えられなかった仕事・働き方を生み出している活動・仕組み・メディアなど、全国のさまざまな取り組みを展示、タブロイド紙「Good Job! Document」とともに発信。

岡部: おっしゃる通り、メンバーの可能性や選択肢を広げていくことがスタッフの役割だと思えます。障害のある人が「やりたい!」と思った気持ちを尊重し、途中で脱線しても見守る。「障害ではなく、人を見ること」や「できないことを悔やむのではなく、できる部分やこだわられる部分を伸ばすこと」を大事にしています。なので、現場のスタッフにはメンバーの日常にある小さな可能性の種を感じ取る力が求められます。

Good Job! センター香芝
奈良県香芝市に位置し、Good Job! Projectの活動拠点として、社会福祉法人わたぼうしの会が運営。設計は建築事務所「o+h」。「アート×デザインによる新しい仕事の創出」「異分野をつなぐプラットフォームの構築」「所得の再配分から可能性の再配分へ」という3つのビジョンを掲げ、障害のある人とともに分野を超えた協働のなかから、社会に新しい仕事をつくり出すことを目指す。カフェでは美味しいコーヒーとホットドッグが人気。そのホットドッグをキャラクター化し、3Dプリンターと手仕事を組み合わせた張子の「Good Dog」を製造・販売。ほかにもオリジナルグッズの製作や全国のユニークな商品を流通する仕事も障害のある人が担う。

東: さきほど樹里さんはじめメンバーが創作活動に取り組む姿を拝見し、ミュージシャンの姿にも重なるなと感じました。彼らも日常のなかに音楽があって、それを、たまたま、あるいはイベントのようなかたちで聴かせてもらえる瞬間がある。そう考えると、どこまでが表現/発表で、どこまでが日常かも曖昧だなと思えてきます。あるとき、僕のようなサウンドエンジニアは、どこまでアーティストに付き添い、日々の創造性を広げていくべきかについて考えたことがあって。岡部さんの話ともつながるんですが、専門的な技術や機材の話ばかりしなくてもいいと気づいた途端、「あ、すべて音のことに集中できる」と思ったんですね。良い音楽を目指すには、アーティスト自身のことを考える時間を増やす方が早い。

伊藤樹里(いとう・じゅり)
1977年生まれ。奈良県在住。アートセンターHANA所属。エイブルアート・カンパニー登録作家。日常的に船場で書いていたニュースの文字を筆で書くことを発見してから、書かなくなった仕事となった。毎日の気になる出来事や、覚えてた自覚の漢字を、とめどなくしゃべりながら書く。漢字をたくさん書く「漢字シリーズ」、日常の出来事をつづった「新聞シリーズ」をはじめ、人の名前など、身近なところから題材を見つける。

岡部: おもしろい! たんぼの家での日常ともつながります。東さんは、どういうきっかけで、そう考えるに至ったんでしょうか？
東: 素晴らしいエンジニアやミュージシャンには共通して、形勢がたい心地よさがあるんです。後で、お風呂に入りながら「あの人の前やと素直でいれるな」と、ふと気づく(笑)。「僕もそんなおらかな空気感が出せたら、

僕の周囲も音楽に包み込まれるのではないかと仮説を立ててみたんです。実践知の蓄積が次の引き出しになるかなと、気長に考えています。

岡部: すごくわかります。障害のある人のアートと聞くと、一見神経質そうな表現や大胆な色彩の絵などをイメージする人も多いと思います。純粋性や天才性といった言葉で評されてしまうことも多い。でも作者本人に会うと、作品とはだいぶ印象が違うということがよくある。僕自身も、樹里さんの作品の奥にある、楽しそうに文字を書く姿、日常の言葉などに惹かれたひとりで。メンバーと過ごす日々のなかで、彼らの表現はもちろん、生活や存在そのものの魅力に気づき、この良さを伝えるためにスタッフと試行錯誤を繰り返しています。



「GJ! センター」では、「グッドジョブ! スーパーマーケット」「X'masクッキー型をつくらう!」など、地域の人たちに足を運んでもらえるマルシェや制作体験を企画・開催しています。また「3Dプリンターの講習会」など、地域の福祉施設の人と学び合う場づくりを通して、パブリックな場としての文化を育んでいます。(岡部)

山でもなく、アートでもなく、 福祉施設でもないこと

岡部: 東さんはサウンドエンジニアの仕事をしながら、食の分野でも活動されていて、とても興味深いです。

東: 録音って、本当に難しいんですね。アーティストが、マイクの範囲外で自由なことをした瞬間にレコーディングは破綻し、後々に語り継がれる“伝説的な瞬間”を取りこぼしてしまうこともある。それもあって、自由さも折り込みつつ録音できる方法を考え、試してきました。アーティストが万全な状態でレコーディングに向かえるようサポートするということがひとつです。食事を考えたり、良い声を出してもらうための走り込みをしてもらったり……。

岡部: なるほど、さきほどの「実践知が次の引き出しになる」というお話ですね。録音を通してアーティストと向き合うなかで、食もエンジニアリングの手法のひとつになりうる。

東: 以前から、聴いたものが聴いたままに録音できないという課題はありました。聴いていた状態と同じように録音できるまで、マイクの位置を微調整したり、植物性の食品に限ってみて体内に取り込むものと聴取と

の関係を観測したり、試行錯誤してきました。自分のなかに音を聴く基準をつくる際には、「食」も外せない要素だと考えています。大きなきっかけは、2014年に開催された国東半島芸術祭ですね。鮎屋法水さんと朝吹真理子さん、zAkさんらの作品『いりくちでくち』の技術サポートをして

いたのですが、現地の食事はスーパーでお惣菜を買うくらいしか選択肢がなく、滞在期間の後半は僕も含めくれる人が食事をつくり、みんなで食べて、ひとつの作品をつくるという状況で、とてもおもしろくて。これを身の回りや地域で広げていくとどうなるかと考えてみると、ずっと「エンジニア」と「食」がつながって見えな

たのですが、現地の食事はスーパーでお惣菜を買うくらいしか選択肢がなく、滞在期間の後半は僕も含めくれる人が食事をつくり、みんなで食べて、ひとつの作品をつくるという状況で、とてもおもしろくて。これを身の回りや地域で広げていくとどうなるかと考えてみると、ずっと「エンジニア」と「食」がつながって見えな

たのですが、現地の食事はスーパーでお惣菜を買うくらいしか選択肢がなく、滞在期間の後半は僕も含めくれる人が食事をつくり、みんなで食べて、ひとつの作品をつくるという状況で、とてもおもしろくて。これを身の回りや地域で広げていくとどうなるかと考えてみると、ずっと「エンジニア」と「食」がつながって見えな

たのですが、現地の食事はスーパーでお惣菜を買うくらいしか選択肢がなく、滞在期間の後半は僕も含めくれる人が食事をつくり、みんなで食べて、ひとつの作品をつくるという状況で、とてもおもしろくて。これを身の回りや地域で広げていくとどうなるかと考えてみると、ずっと「エンジニア」と「食」がつながって見えな



photo: Mai Naito

■ 岡部：山が日常になるという感覚は、僕には実感がありませんが、単なる健康志向ではないのだと最近わかってきました。

■ 東：健康志向の側面もありますが、例えば山食音が考える「ハイキング」は、衣食住を持ち歩き、1泊以上が成り立つようにすることなんです。必要最低限のものを吟味して、寝袋を背負って山に登り、朝降りてくるだけで、自分の生活に何が必要で、何をすべきかが自然と整理される感覚があって、「日常を対象化できること」も魅力のひとつですね。

■ 岡部：日常を少し切り離して、客観的に考えることができる。

■ 東：そうですね。ちょうど、あそこのペランダとか寝やすそう(笑)。

■ 岡部：(笑)。このアートセンターHANAができて早や10年ですが、こういう自由な空気を持つ場でさえも、気を抜くと固定化してしまうんですよね。それこそ、ここに日常と切り離して考えられる視点を持ち込む実験を繰り返しています。例えば、3年前の正月明けには、sonihouseさんとともに、1階ギャラリーに置いた巨大こたつを囲み、障害のあるメンバーと24時間さまざまな番組を発信する「24時間こたつラヂヲ」を企画しました。アサダワタルさんと野村誠さん、櫛野展正さんなどゲストを招いてのトークやワークショップ、餅つき、コーラス、深夜はスナックと化す、なんでもあり(笑)！ 観覧者も24時間何時でも出入りして参加できるという。

■ 東：ウェブ配信を見たような気がします。

■ 岡部：僕は福祉施設で、まちの公民館以上に使い倒せる場だと思っています。

□sonihouse
音とそれとまつわる場とデザインについて考え実践する。奈良の工房兼スペース。総務万平氏と長谷川アンナ氏が主宰。自宅を音響機器の固定された器としてとらえ、理想の音響環境を生活空間に構築し、観客をその場に招くことでプロジェクトが発展すると考え、2007年より自宅を「sonihouse」と名付け活動を開始。12面体スピーカー「scenery」の設計から設置、自宅を会場とした「家宴」の企画などを行う。

いろんな人が訪れて、さまざまな使い方をすると、ここで働いているスタッフやメンバーも新しい発見がある。そうすることで、障害のある人の存在や日常の魅力を伝えることもできると考えています。

■ 東：なるほど。そういう場って、「アート」という言葉で表現するとわかりやすいけれど、別の視点をもたらしてくれるような……、もう少しのほかの言葉があるのかも。僕が考える「山」もしくは「自然」という概念も当てはまるかもしれない。よく「なんで山がいいんですか？」と聞かれるんですが、難しく。実は、山じゃなくてもいいし。

■ 岡部：そうそう。アートでなくても仕事かもしれないし、遊びかもしれないし、スポーツかもしれない。そういう多様な切り口で見たときに、さらに輝くものがあるはずなんですよね。

たんぼぼの家の理事長・播磨靖夫からは「異なったものとつなぐれ」とよく言われます。播磨自身が元新聞記者で、福祉関係者でも美術関係者でもない。根がジャーナリストなんです。「どちらでもないということが強み」とも話していて、たんぼぼの家自体そういう存在なんだと思います。福祉施設のように福祉施設ではない。アートセンターのようにアートセンターではない。「じゃあ、何？」と自ら問いかけながら実践していく場なんだと思っています。

□播磨靖夫(はりま・やすお)
1942年生まれ。兵庫県出身。一般財団法人たんぼぼの家理事長、社会福祉法人わたぼうしの会理事長ほか、新聞社記者、フリージャーナリストを経て現職。芸術文化を通して人間が人間らしく生きていくことのできる社会をめざし、その取り組みとして「障害者アート」や「芸術とヘルスケア」の試みを続けている。編著に、『生命の園のある家』たんぼぼの家(2003年)ほか。

体験を多様な文脈でとらえ直せることが重要だなど。今その場にあるもので楽しむ、プリコラージュ的思考とも言い換えられるかもしれません。

■ 東：その思考が発揮される場面って、どういったときですか？

■ 岡部：例えば、樹里さんは薬の殻を大量に集めています。それを知った周囲の人も、いつしか自分や家族が飲んだ薬の殻を持ってきて彼女に渡すようになり、いつの間にか樹里さんは「○○さんは、こういう痛み止めを飲んでる」という情報もすべて記憶している。薬の殻を介したコミュニケーションを通して、樹里さんという存在から生まれる独特の文脈を感じられると思ったんです。だから、樹里さんのご両親も薬の殻を捨てなかった。

■ 東：でも日常において、表現活動の幅と文脈を見定める作業は、際限がなくて、とても大変なことですよ。

■ 岡部：そうなんです。福祉サービスの評価につながることもないし、数値化されることではないけれど、それこそが大事だったりする。流れ作業的な仕事が多い現場は、一見「非生産的」なものも切り捨てられてしまう傾向があります。でも「これもその人の大切な表現かもしれない」と想像できたら、その行為自体を大切に思えると思うんですよ。

■ 東：その場に漂う空気感のように測れないものですが、それがたんぼぼの家の良さでもあるのでしょうか。

■ 岡部：そう思います。だからこそ、僕やスタッフがたんぼぼの家で感じてきた「存在することがその人の仕事かもしれない」という気づきを、うまく伝えていきたい。お金を稼ぐだけでなく、その人の存在が認められる、その人がいないと成り立たない、そんな環境やコミュニティをつくるのが本来の「仕事」なんだと思います。世間ではできないと思われている人たちが、それをやることに意味がある。ちなみに樹里さんは、薬の殻集めを「これはお仕事です」と断言していて、でも国内外の美術館から出展依頼があって、結局本当に彼女の仕事になったんです(笑)。

■ 東：障害とは何なのか、もう一度とらえ直すことにもつながりますね。

■ 岡部：周囲に障害のある人がいないと想像しづらいことも事実で、まだまだ社会で「不自由な存在」という認識しかないように感じます。

■ 東：認識の解像度を上げていく必要がありますよね。音に置き換えてみる



「アーティストと野山へ向かい、フィールドレコーディングを行う企画「野となり、山となる」を山食音の活動としてスタート。初回は、歌い手・池間由希さんと京都・沢ノ池で録音。音楽が立ち上がる環境や音のあり方に目を向け、お店での報告会を通じて言語化を進めています。春にレコードを発売予定。(東)」

と、音楽ジャンルのひとつである「ノイズ」も、一聴してその全体像をつかむことは難しい。ただフィルターで一つひとつ解像度を上げて、音像を分析していくと、きれいなサイン波になるんです。

■ 岡部：ほとんど同じことですね。解像度や受信感度を上げることで、もやもとした全体ではなく、より「個」が見えてくる。6年ほど前に韓国へ行ったのですが、北朝鮮の障害のある人と交流している研究者に出会ったんです。その人から、北朝鮮特産のハリネズミの毛先を使った爪楊枝を1本だけお土産にいただいて。そのときはじめて「あの国のどこかで、これをつくって、その収益で生きている人がいる」と、国という単位ではなくそこに暮らす1人の人間を想像しました。1本の爪楊枝から、これまでマスメディアの情報からでしかわからなかったステレオタイプな国や人種などのイメージがガラッと変わるという体験をしたんです。

■ 東：僕の場合、「聴く」ことが想像へとつながり、自分の知るメロディや音質といった偏りを無くすように思います。例えば、フィールドレコーディングをして、音を聴き対象を深く知るほど、アーティストが出す音とその周囲にあるノイズの境界、大きな括りとしての「ノイズ」がわからなくなるんです。全体と思っていたものが、何かの音の集合だと知る。

■ 岡部：福祉サービスを受けるなど、社会的なサポートを得るために、障害に種別や区別をつける必要性があるのは事実です。ですが、彼や彼女の表現のクオリティの高さや存在のユニークさを目の当たりにすると、もう何を障害としたらいいのかわからなくなる。もちろん、障害があるだけで、すごい作品ができるわけではありません。表現は、自身の生活歴や興味の範囲、こだわりの度合いとイメージを実現する技術、そしてなにより周囲の受け止め方が絡み合って成立するものです。そんな世界にいると、自分が「障害者ではない」とも言い切れないし、逆に「健常者ってなんなんだ」と揺らぎますよ。そもそも人間の幅そのものが、自分の想像以上にうんと広いんだと感じる毎日ですね。C

個人として付き合うほどに、何が障害かわからなくなる

■ 東：日常や生活の「心地よさや豊かさ」を問われたとき、僕は「考え、妄想する時間を長く持つこと」だと考えます。日常の些細な情報から「なぜそうなのか」と、間違ってもいいから仮説と検証を試みるんです。例えば「インドの人はカレーを手で食べるけれど、なぜ？」のように、手で食べてみてわかることもある。久しぶりにスプーンで食べると、熱くても食べられる(笑)。仮説と現実の差を楽しむ時間が多いほど、いろんな場面で偏見のない状態を保てる気がします。突然に出会ってしまう不思議な状況を受け止めるとき、すでに知っていることしか手がかりがない。何が起きてても偏見なく物事を見たいという願望があるんですね。

■ 岡部：東さんの「ほんまにそんなかなあ？」とものごとの根拠を疑う視点は、子どもの頃から身につけていたんですか？

■ 東：小さな頃から自然のなかで起こる現象に興味がありましたね。なぜここは晴れているのに、あっちでは雪が降るのかと調べていたら、暖かい空気が上昇して冷たくなっているところへ落ちていく、その単純な繰り返しに気づくわけです。そして、お湯を沸かしながら、鍋の中の気泡が雲の流れと同じ動きをしている様子を見て、「きれいだな」と感情が勝手に揺り動かされる。岡部さんは、豊かさをどう考えますか？

■ 岡部：僕の場合は、生活のなかでいろんな文脈を持つことが豊かさにつながると思っています。東さんが雲と気泡の流れの共通性を見たように、

でを、私たちは日常だと勘違いしているのだろう。それは、日常と非日常だけに限った話でない。例えば、都市と自然、暮らしと表現、健常と障害。そういった分け隔てる言葉は便利だが、「世界」とはそれらが常に平然と同居し、すべてつながっている状況こそを指す。さらされた皮膚や目ととらえる外界の様相は、言葉よりも複雑に入り混じる不可分の連なりだ。今回の対談では、単語や名詞を借用しすぎない態度のもと語られていたように思う。それはこれから生きる私たちにとってとても大切な振舞いだ。「知っている」という思い込みは、いつだって単語や名詞に唆され気づかないうちに権えつけられるのだから。ドレのはざまに存在する無数の振動にひとつずつ名前をつけるなんてナンセンスな行いだと思わない？ 世界は果てがなく、知らないことで充滿しているのに。

Review by Spectator

立会人：野口卓海(美術批評家/詩人)

2月3日、亀岡のみずのき美術館まで知り合いの美術作家たちが参加する展示を見に出かけた。嵯峨嵐山で育った私からすれば、亀岡には中高の友人が数人住んでいたし、それほど馴染みのない町でもない。と思いついて。駅へ着いたのは確か午後4時を過ぎた頃、およその方角だけを頼りに歩く夕暮れの町並みは、もはや完全に知らない場所だった。では、電車を降りて歩き出すまで、私はいったい何を知っていると思っていたのか。それは果たして形を持っていたのか？ そんなことを考えながら、旅と相違ない心地で知らない町に行く。普段利用する駅からたった30分足らずで、日常はいともたやすく途切れていた。どの曲がり角ま

オープン北加賀屋

地域の出来事をひらく、伝える

都市のなかにある農園の可能性を探る
みんなのうえんラボ

金田康孝 (NPO法人コトハナ)
まちづくりや農業のプロジェクト、アート・暮らしにまつわるイベントを多数企画。北加賀屋みんなのうえん管理人。

ヒトと生態系

Illustration: Takahiro Shimada



▲生態系調査の様子。プランターの下にいる虫などを探す。

みんなのうえんがある土地はもともと銭湯で、数十年前に廃業してから農園ができるまで、ずっと空き地でした。そこをみんなで開墾し畑にしたのは6年前。当初は雑草も生えない畑でしたが、時間とともにさまざまな動植物が訪れる場所になってきました。この場所に流れる緩やかな時間は、「いろんな生き物がいる」ことが大きな要因だと感じています。そこで、都市の農園が生態系にどんな影響を及ぼし、どうすればより多くの生き物が訪れてくれるのかを、専門家と調べることになりました。調査方法は、現地でのフィールド観察、サンプルの捕獲、周辺の公園との比較です。対象は鳥類、昆虫類、植物など、あらゆる生物種。結果、鳥類8種、昆虫30種、野菜や果物以外の植物が48種確認され、近くの公園と類似した生物相(一部、公園

にはいない鳥が農園で採餌)が根付いているとわかりました。また、周囲の緑地などと比較すると、靴の裏にタネがついたり、車にひっついて虫が移動したり、餌場を求めて飛来したりなどして、まちに点在する緑地を多様な方法で移動していることが浮き彫りに。しかし、農園には樹木が少なく、水場もないため、近くにはいるけど農園にはほぼ間違いなく訪れない生き物があることもわかりました。この結果からの学びは、都市のなかで途切れ途切れな緑地でも生態系ネットワークがあるということ。みんなのうえんのような小さな点が中継地としての機能することで、まちなかでも思いも寄らぬ出会いをつることができるかもしれません。また、もうひとつの調査として、農園メンバーの生き物への感じ方

をヒアリングしました。人が不快と感じる虫でも、生態系では何らかの役割を担っています。排除ではなく、いかにいい距離を保ち共存できるかが、生態系を豊かにするためには重要です。とはいえ、農園は生き物や自然への愛が深い人が多いので、場所のポテンシャルを幅広く考えられそうです。

旧千鳥文化住宅再生日記 その6

さて、千鳥文化はゆっくりと動き出しています。モーニング&ランチの営業と週末のバー営業。地元の方に加え、アーティストやデザイナーも顔を出してくれています。そんななか、今年の1月12日(金)から1月28日(日)まで僕も大ファンの写真家・西光祐輔の個展「THE NIGHT」が千鳥文化とコーポ北加賀屋で開催されました。そんな開催期間中のある朝、僕の事務所も入っているコーポ北加賀屋に出動し、フラリと西光さんの写真を見ていると、写真の前の床に、猫の糞より大きな糞(ライスの大盛りくらい)が折り重なるように盛られていました。きっと夜の闇にまぎれて、写真のなかの獣が這い出し、用を足して、写真のなかに戻ったのだと思います。これが西光祐輔の「THE NIGHT」。

家成俊勝 (千鳥文化PJ 設計担当)
2004年、赤代武志と建築事務所dot architectsを共同設立。北加賀屋を拠点に、さまざまな企画に関わる。



▲西光祐輔個展「THE NIGHT」の千鳥文化での写真展示風景。コーポ北加賀屋と2会場で開催された。



▲個展中は毎夜、西光さんがバーテンダーとなり、来場者や近隣住民を接客。カラオケも整備した。

アーティスト・MASAGONの古今東西
街と路上の異景図鑑

No.03
EVOL

《Washington Intervention》アメリカ・ワシントン

まちのインフラや段ボールなどを支持体に、無数の窓が連なるビルの精密なスプレーペイントを描くEVOLは、路上の野性を感じるペインターのひとりだ。彼の作品には、タグ付け=路上の遊びとは別の美学、その壁に描く必然性、計算された美しさがある。

MASAGON(アーティスト)/北加賀屋を拠点に活動

TOPICS from CFCO

REPORT

1 MASK「Open Storage 2017」開催

2017年11月に行った、大型美術作品の収蔵庫 MASK [MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA] の一般公開。メインアーティスト・金氏徹平が、《White Discharge (公園)》《tower (THEATER) 舞台セット》の大型作品を展示に加え、ヤノベケンジ作品の配置変更や、宇治野宗輝作品の照明と会場の全体照明を連動させるなど、収蔵作品にも大胆に介入するインスタレーションを展開。従来は来場者が足を踏み入れることができなかったバックヤードの作品の間にも通路をつくり、元工場・収蔵庫という空間の特異性を最大限に生かした展示となりました。また、近隣の千鳥文化では、極小居室2部屋で、解体時に出た廃材を利用した金氏の新作インスタレーションや、未発表作品を含む作品を展示し(現在は常設展示中)、MASKとのコントラストが際立ちました。

ほかに、1日限りの音楽フェスティバル「おもフェス」や建築家の青木淳、映画監督の山下敦弘とのトークを開催するなど、充実したプログラムとなりました。

展示期間: 2017年11月3日(金・祝)~11月26日(日) 参加作家: 金氏徹平、宇治野宗輝、久保田弘成、名和晃平、やなぎみわ、ヤノベケンジ 会場: MASK(大阪市住之江区北加賀屋5-4-48)、千鳥文化(大阪市住之江区北加賀屋5-2-28) 主催: 一般財団法人おおさか創造千鳥財団

おおさか創造千鳥財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術、文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

<http://www.chishimatochi.info/found/mask/>



Photo: Ai Nakagawa

千鳥文化とMASK、2つの展示会場にてトークやライブイベントなど開催

2 下道基行 写真展「ははのふた」、新しい骨董「期間限定ショップ」開催

<https://www.facebook.com/chidoribunka/>



写真展と「新しい骨董」ショップ開催中には、下道ほか「新しい骨董」メンバーが集まりトークも開催した



2017年8月にオープンした新スペース「千鳥文化」のこけら落としとして、下道基行の写真作品シリーズ「ははのふた」の展示と、下道も参加する活動体「新しい骨董」の期間限定ショップを開催しました。

下道の義母が、お茶を入れたカップや急須の上にお皿を置くなど用途の異なるものを蓋として代用する一連の写真作品は、アトリウムと食堂の2か所に展示され、資材を船や廃屋から調達したと思われる木造のプリコラージュ建築である千鳥文化のコンセプトとも共鳴したものとなりました。

また、取り壊される建物から集められた建具などの価値を再認識し発信していく「古材バンク」のスペースでは、ウェブサイトでの販売が中心だった「新しい骨董」の商品を期間限定で販売。下道が北加賀屋で採集したトラックに轢かれた空き缶、ドイツで採集したビール瓶の王冠や落ち葉などが、ストーリーが書かれた証明書とともに100円で販売され、幼児から大人まで幅広い層に購入されていきました。

展示期間: 2017年8月26日(土)~11月26日(日) 会場: 千鳥文化(大阪市住之江区北加賀屋5-2-28) 主催: 千鳥土地株式会社

ACTIVITY

1 2017年度創造活動助成
維新派《AMAHARA ~ 當臺灣灰牛拉背時》
<http://waf.npac-weiwuying.org/en/programs/amahara/>



Photo: National Kaohsiung Center for the Arts (Weiwuying)

台湾第二の都市・高雄に2018年10月オープンする、アジアで最大の国立劇場・衛武營(ウェイウーイン)。同組織が主催するフェスティバルからの招聘を受け、肌寒い日本から、30度超えの台湾へ。いつも通り稽古を行い、いつも通り本番を迎え、これまでと変わらない光景のなかで、47年目の最後の千秋楽を終えた。

文: 清水翼(元維新派制作)

2 2017年度スペース助成
空間現代《擦過》大阪公演
<http://kukangendai.com/>



Photo: Katayama Tatsuki

2016年に京都へ拠点を移した空間現代、初の大阪単独公演。近年制作に取り組む60分の長編楽曲シリーズ1作目《擦過》をBLACK CHAMBERにて上演した。観客が2階から階下のステージを鑑賞する仕様に合わせ、音響・照明演出にもこだわった。自ら京都で運営するライブハウス「外」にて2018年再演予定。

文: 山田英晶(空間現代)



みずのてつお
Tetsuo Mizuno

京都造形芸術大学名誉教授/NPO法人地球デザインスクール理事長

1948年愛知県生まれ。2007年より京都造形芸術大学子ども芸術学科長に就任。2014年に同校を退職、名誉教授に就任。こどもの視点で世界を見直すことでアートが変わり、社会が見え、人と自然のつながりと彩りが豊かなものになっていく。

>みずのさんが選ぶ次のコラムニストは…
スズキキヨシ氏(パーカッションニスト/おんらく市場代表)
人が、場所が、まちが、音で案になっていく。そんな、音を楽しむ言葉通りに生きている人。

のまの風景を生かして、新しい人の流れをデザインしたシェアショップ『モトタバコヤ』や、住みながら生活に合わせて手を入れ続けている『大辻の家』、奥の和室を残すことで地域性や生活感を展示空間に取り込んだギャラリ『Treehouse konan』など、エリア内9件ほどの設計に関わっています。また、2013年には自宅も移し、暮らしや仕事を通してまちでのライフスタイルを実践。こうした活動を「リミックス・タウン」と呼んでいます。「リミックス」とは、既存の曲を編集して新たな楽曲とする音楽的な手法です。新しい音を足す、アレンジを変える、時代に合わせてミキシングすることも含みます。大規模な再開発のようにマスタープランに沿ってつくられるのではなく、既存のまちの風景やインフラも含めて尊重し活用しながら、必要に応じて少しずつ新しいものを足していく。元の機能を回復する意味合いの「リフォーム」、性能を向上させ必要に応じて機能も足して新たな価値に変換する「リノベーション」などの、建築や不動産の言葉には含まれない、地域性やまちの雰囲気、周辺に住む住人の生活感を含むニュアンスを、設計に取り込むための手法です。こうして育まれていくまちには、昔からそこにある生活のリズムに寄り添いながら、古いものと新しいものがリミックスされていくグルーブ感が暮らしのなかで息づき、新しい幸福感に満ちています。

『paper C』は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

ハートのなかに宿る、こどもとアート

冬の陽だまりのなか、少し緩んだ陽気に誘われて公園の芝生の一角には、なにやら子どもたちや家族連れ、お年寄りらが集まっている。木工所の端材、ダンボール、靴下の輪っかになった端材、トイレレットペーパーの芯が山盛りに。下着メーカーさんからの刺繍の入った布地、壊れた傘、家庭から出るプラスチック…。京都市ゴミ減量推進会議が毎月主催するフリーマーケットのなかに、「捨てるなんでもつたいない！」を合言葉に「愉快なおもちゃ箱」というコーナーを設けた。家庭や事業所からでるゴミを減らすというよりも、何かおもしろく関われないかと、造形大を

退職後、取り組み始めたことのひとつだ。子どもから見れば、これらは宝の山であり、造形遊びの格好の素材となる。

自由な遊びというアートの精神には、思ってもみない意味や発見、そして関わる人たちとのコミュニケーションが生まれる。手を動かして、何をつくらうかと工夫する様には世代を越えて楽しむシーンが生まれる。

昨年、児童館でこども食堂を月1回のペースで設けたときには、地域に関わるいろいろな人が出会うことができた。学校、お寺、福祉関係、老人会、婦人会におやじの会、自治会、そして子育て世代から大学生たちと、まるで銭湯のようにほっこりした気軽な場が生まれた。集まって食べることをきっかけに歌やゲームに紙芝居、季節に応じたお飾りつくりと、自然発生的に関わりが生まれた。それぞれが感じ、あるがままに表すことで何とも言えない良い空気が生まれる。乳幼児から手足がおぼつかないお年寄りまで、感じ応答する様子は芸術本来の「生きる」生きざら「表現が現れるように思う」。

退職を機に始めた「アトリエみ塾」は、まさに未熟な3歳の幼稚園児から、熟した人生の「実熟な人たち」を対象にした場づくりだ。未熟から実熟まで、アートを通じたつながりのなかで見えてくる彩りには、今を息づく、とらわれない未来の薫りが立ち込めてくる気がする。



西山広志
Hiroshi Nishiyama

NO ARCHITECTS 代表/建築家
1983年大阪生まれ。2009年神戸芸術工科大学大学院修士課程修了。2011年大阪市此花区への事務所移転に伴いNO ARCHITECTS設立。建築をベースに、設計やデザイン、ワークショップ、会場構成など幅広く活動中。摂南大学・近畿大学 非常勤講師。著書『REMIX TOWN』(RAD/2017)。

>西山さんが選ぶ次のコラムニストは…
影山裕樹氏(OFFICE YUKI KAGEYAMA)
編集者という肩書きではとらえきれない活動が魅力的です。まちにとって必要なメディアのとりえ方は、近くて遠くてほど良い距離感。

リミックス

つないで見える、
人とまちの多彩なあり方

「リミックス・タウン」という まちのとらえ方

昭和の下町情緒が残る大阪の此花区梅香・四貫島エリアでは、2007年より地域の土地会社とまちづくり会社との協働で、まちの再活性化プロジェクト「此花アーツファーム」がスタート。毎年開催されるイベント「見つけ！このはな」を通して空き家や空き工場が活用され、アーティストや音楽家、建築家、詩人など、創造的な活動を志す若者が集まる地域として注目を集めています。NO ARCHITECTSは2011年に此花へ事務所を移転し、地域で活動する工務店とともにアーツファーム事務局を引き継ぎました。既存

のまちの風景を生かして、新しい人の流れをデザインしたシェアショップ『モトタバコヤ』や、住みながら生活に合わせて手を入れ続けている『大辻の家』、奥の和室を残すことで地域性や生活感を展示空間に取り込んだギャラリ『Treehouse konan』など、エリア内9件ほどの設計に関わっています。また、2013年には自宅も移し、暮らしや仕事を通してまちでのライフスタイルを実践。こうした活動を「リミックス・タウン」と呼んでいます。「リミックス」とは、既存の曲を編集して新たな楽曲とする音楽的な手法です。新しい音を足す、アレンジを変える、時代に合わせてミキシングすることも含みます。大規模な再開発のようにマスタープランに沿ってつくられるのではなく、既存のまちの風景やインフラも含めて尊重し活用しながら、必要に応じて少しずつ新しいものを足していく。元の機能を回復する意味合いの「リフォーム」、性能を向上させ必要に応じて機能も足して新たな価値に変換する「リノベーション」などの、建築や不動産の言葉には含まれない、地域性やまちの雰囲気、周辺に住む住人の生活感を含むニュアンスを、設計に取り込むための手法です。こうして育まれていくまちには、昔からそこにある生活のリズムに寄り添いながら、古いものと新しいものがリミックスされていくグルーブ感が暮らしのなかで息づき、新しい幸福感に満ちています。